

Asia Indicators

発表日: 2020年7月17日(金)

豪・雇用に予想外の底堅さも、今後は再規制が下押しへ (Asia Weekly(7/13~7/17))
 ~シンガポールは新型肺炎の影響で景気が大きく下振れして「テクニカル・リセッション」へ~

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部
 首席エコノミスト 西濱 徹 (TEL: 03-5221-4522)

○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
7/13(月)	(インド)6月消費者物価(前年比)	+6.09%	+5.30%	+6.27%
7/14(火)	(シンガポール)4-6月実質GDP(前年比・速報値)	▲12.6%	▲10.5%	▲0.3%
	(中国)6月輸出(前年比)	+0.5%	▲1.5%	▲3.3%
	6月輸入(前年比)	+2.7%	▲10.0%	▲16.7%
7/15(水)	(韓国)6月失業率(季調済)	4.3%	--	4.5%
	(インドネシア)6月輸出(前年比)	+2.28%	--	▲29.48%
	6月輸入(前年比)	▲6.36%	--	▲42.33%
	(インド)6月輸出(前年比)	▲12.4%	--	▲36.2%
	6月輸入(前年比)	▲47.6%	--	▲52.4%
7/16(木)	(ニュージーランド)4-6月消費者物価(前年比)	+1.5%	+1.5%	+2.5%
	(韓国)金融政策委員会(政策金利)	0.50%	0.50%	0.50%
	(豪州)6月失業率(季調済)	7.4%	7.4%	7.1%
	(中国)4-6月実質GDP(前年比)	+3.2%	+2.5%	▲6.8%
	6月鉱工業生産(前年比)	+4.8%	+4.7%	+4.4%
	6月小売売上高(前年比)	▲1.8%	+0.3%	▲2.8%
	6月固定資産投資(年初来前年比)	▲3.1%	▲3.3%	▲6.3%
	(インドネシア)金融政策委員会(政策金利)	4.00%	4.00%	4.25%
7/17(金)	(シンガポール)6月非石油輸出(前年比)	+16.1%	+6.2%	▲4.6%

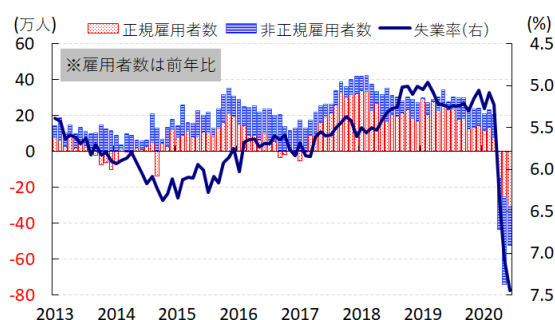
(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

[豪州]~経済活動再開に伴い非正規雇用を中心に拡大の動きも、当面は厳しい雇用環境は変わらない模様~

16日に発表された6月の失業率(季調済)は7.4%となり、前月(7.1%)から0.3pt悪化して1998年11月以来の高水準となった。失業者数は前月比+6.9万人と前月(同+8.1万人)から4ヶ月連続で拡大し、雇用形態別でも正規雇用に対する求職者数(同+3.8万人)のみならず、非正規雇用に対する求職者数(同+3.1万人)もともに拡大しており、中期的な基調も拡大傾向を強めている。地域別では、最大都市シドニーを擁するニュー・サウス・ウェールズ州や、第2の都市メルボルンを擁するヴィクトリア州など大都市部で失業者が拡大する動きがみられる。一方、雇用者数は前月比+21.1万人と前月(同▲26.4万人)から4ヶ月ぶりの拡大に転じており、雇用形態別では正規雇用者数(同▲3.8万人)の減少が続く一方で非正規雇用者数(同+24.9万人)の拡大が全体の押し上げに繋がった。ニュー・サ

ウス・ウェールズ州やヴィクトリア州など大都市部のみならず、その他の州でも拡大の動きがみられるなど、新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）の感染収束に伴う経済活動再開の動きが影響したとみられ、中期的な基調も減少傾向が続くもそのペースは鈍化している。なお、労働力人口は前月比+28.0万人と前月（同▲18.3万人）から3ヶ月ぶりの拡大に転じており、中期的な基調も減少ペースが縮小するなど底入れしており、事態収束や経済活動の再開を受けて労働市場に回帰する動きが強まっているとみられる。結果、労働参加率は64.0%と前月（62.7%）から1.3pt上昇するなど内容面では改善の動きもみられる。ただし、雇用回復は非正規雇用が中心であるなど総賃金の上昇に繋がりにくい上、足下ではヴィクトリア州やニュー・サウス・ウェールズ州で再度外出制限が強化される動きもみられるなど、雇用環境の回復の足取りは重い状態が続くと見込まれ、物価も上振れしにくい環境が続くであろう。

図1 AU 雇用環境の推移



(出所)CEICより第一生命経済研究所作成

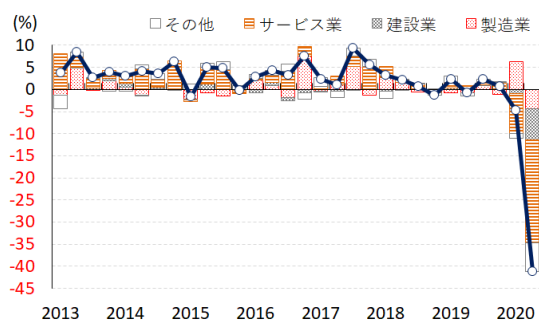
【シンガポール】～新型コロナウイルス感染拡大を受けた内・外需の低迷により、シンガポールはリセッション入り～

14日に発表された4-6月の実質GDP（速報値）は前年同期比▲12.6%となり、前期（同▲0.3%）から2四半期連続のマイナス成長となるとともに、マイナス幅は過去最大となった。前期比年率ベースでも▲41.2%と前期（同▲3.3%）から2四半期連続でマイナス成長となるリセッション（景気後退）となっている上、マイナス幅も過去に遡って最大となるなど深刻な景気減速に直面している。すべての分野で生産に大きく下押し圧力が掛かっており、なかでも建設業については新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）の感染拡大を受けた外出制限措置に伴い多くの事業が中断を余儀なくされたことで前期比年率▲95.6%と大幅に減速した。さらに、外出制限措置の余波を受ける形で幅広くサービス業の生産にも下押し圧力が掛かり、前期比年率ベースで▲37.7%と大幅に減速する事態に直面した。なお、新型コロナウイルスのパンデミック（世界的大流行）に伴う世界的な医薬品需要の高まりを受けて、バイオ・医薬品関連で生産拡大の動きがみられたことが下支え要因となり、製造業の生産は前期比年率ベースで▲23.1%と他の産業に比べて減少幅は小さかったものの、全般的に厳しい状況に見舞われたことは変わりがない。同国政府は今年5月、景気刺激策の第4弾の公表に併せて今年通年の経済成長率見通しを▲7.0～▲4.0%に引き下げているが、足下の状況は想定を上回る下振れとなっていることを勘案すれば、さらなる下方修正が必要になる可能性は高いと見込まれる。

17日に発表された6月の非石油輸出は前年同月比+16.1%となり、前月（同▲4.6%）から2ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じた。前月比は+0.49%と前月（同▲4.59%）から3ヶ月ぶりの拡大に転じており、中期的な基調も辛うじて拡大傾向を維持するなど底堅い動きが続いている。財別では、主力の

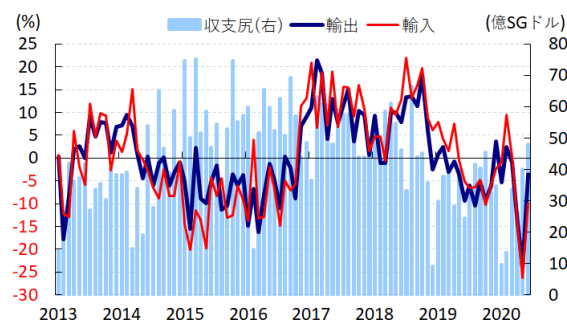
輸出財である機械製品関連や化学製品関連の輸出に底打ち感が出ているほか、金価格の上昇を反映して金の輸出額に押し上げ圧力が掛かっていることも上振れに繋がっている。石油関連を併せた総輸出額は前年同月比▲3.6%と4ヶ月連続で前年を下回る推移が続いているものの、前月（同▲23.9%）からマイナス幅は縮小した。前月比も+5.6%と前月（同▲2.6%）から3ヶ月ぶりの拡大に転じており、国際原油市況の底入れの動きも押し上げに繋がっている。一方の輸入額は前年同月比▲9.9%と3ヶ月連続で前年を下回ったものの、前月（同▲26.2%）からマイナス幅は縮小した。前月比も+4.8%と前月（同▲8.4%）から5ヶ月ぶりの拡大に転じており、国際原油市況の底入れの動きが押し上げに繋がっている。結果、貿易収支は+47.99億SGドルと前月（+40.33億SGドル）から黒字幅が拡大した。

図2 SG 実質 GDP 成長率(前期比年率)の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図3 SG 貿易動向の推移

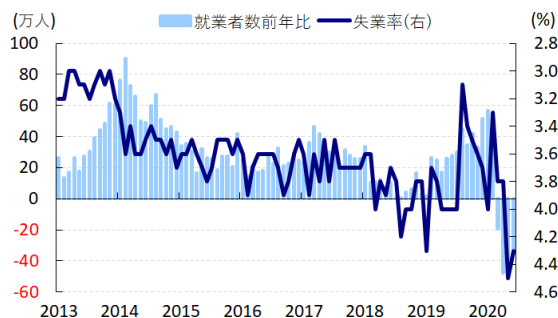


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[韓国]～高齢層及び非正規雇用を中心に雇用底打ちの動きも、若年層を取り巻く状況は依然として厳しい～

15日に発表された6月の失業率(季調済)は4.3%となり、前月(4.5%)から0.2pt改善したものの、2ヶ月連続で4%を上回る水準で推移している。失業者数は前月比▲2.9万人と前月(同+19.1万人)から2ヶ月ぶりの減少に転じているものの、中期的な基調は拡大傾向が続いている。年代別では50代及び60代以上の高齢層を中心に減少する一方、20代では減少が進まないなど若年層を中心に厳しい状況にある。一方の雇用者数は前月比+7.9万人と前月(同+15.3万人)から2ヶ月連続で拡大しているものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど下押し圧力がくすぶっている。年代別でも、20代や40代など若年層や働き盛り世代を中心に調整が続く一方、50代や60代以上の高齢層を中心に拡大するなど年代ごとの跛行色が鮮明になっている。また、雇用形態別では雇用拡大の動きは非正規雇用が中心となっており、安定した雇用拡大の動きには繋がっておらず、雇用者全体に占める非正規雇用の割合も拡大している。なお、労働力人口は前月比+0.5万人と前月(同+3.5万人)から2ヶ月連続で拡大しているものの、中期的な基調は減少傾向を強めるなど頭打ちしている上、年代別でも60代以上の高齢層が中心であるなど、若年層や働き盛り世代を中心に労働市場への回復が進んでいない様子もうかがえる。当研究所が試算した10代及び20代の若年層の失業率は9.9%と前月(10.1%)から0.2pt低下しているものの、依然として全体の水準を大きく上回る状況は変わっていない。

図4 KR 雇用環境の推移

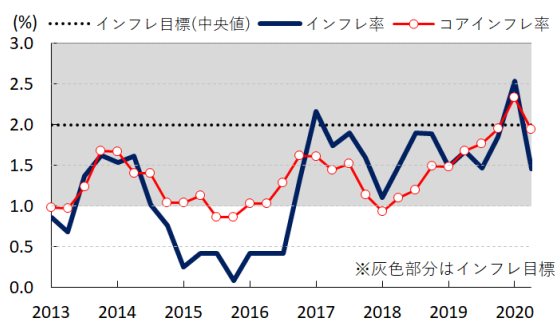


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[ニュージーランド]～新型コロナ対策に伴う経済活動停止の影響を受けて、幅広い分野でインフレ圧力は後退～

16日に発表された4-6月の消費者物価は前年同月比+1.5%となり、前期(同+2.5%)から鈍化して中銀の定めるインフレ目標の中央値(2%)を下回る伸びとなった。前期比も▲0.48%と前期(同+0.77%)から4年半ぶりとなる下落に転じており、国際原油市況の調整の動きなどを反映してエネルギー価格の上昇圧力は後退する一方、生鮮品を中心とする食料品価格は上昇傾向が続くなど生活必需品を巡る物価の動きはまちまちの状況にある。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率も前年同期比+1.95%と前期(同+2.34%)から鈍化しており、インフレ目標の中央値をわずかに下回っている。前期比も▲0.19%と前期(同+0.67%)から丸3年ぶりの下落に転じており、新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)の感染対策として大部分の経済活動が停止されたことで幅広く財、サービスの両面で物価に下押し圧力が掛かる動きが顕在化した。特に、サービス物価については外出抑制措置が実施されている間は公共交通機関などで無料になったほか、観光客数の激減を受けてホテル料金も大きく値下がりする動きがみられ、結果的に物価への下押し圧力が強まる事態となった。

図5 NZ インフレ率の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[インド]～上振れしたインフレ率に一服感が出る一方、輸入の低迷長期化を受けて貿易収支は徐々に黒字化～

13日に発表された6月の消費者物価は前年同月比+6.09%となり、中銀(インド準備銀行)が定めるインフレ目標(4±2%)の範囲を上回る伸びとなった。なお、同国では新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)の感染拡大に伴いモディ政権が全土で実施した外出禁止令の影響で、4月及び5月は消費者物価に関するデータが入手出来ない状況にあったものの、今回の発表に併せて遡及してデータが公表された。結果、6月は5月(前年同月比+6.27%)から伸びは鈍化しているものの、前月比は+0.46%と前

月（同▲0.33%）から2ヶ月ぶりの上昇に転じるなど、物価は一進一退の動きをみせている。前月比が上昇に転じた背景には、生鮮品を中心とする食料品価格の上昇圧力が強まる動きがみられるほか、国際原油市況の底入れを反映してエネルギー価格も上昇するなど、生活必需品を中心とするインフレ圧力の高まりが影響している。他方、当研究所が試算した食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は逆に伸びが加速しており、景気減速に伴う雇用環境の悪化を反映してサービス物価に下押し圧力が掛かる一方、エネルギー価格の上昇に伴う輸送コストの上振れや通貨ルピー安に伴う輸入物価への押し上げ圧力などが物価上昇圧力に繋がる兆候がうかがえる。

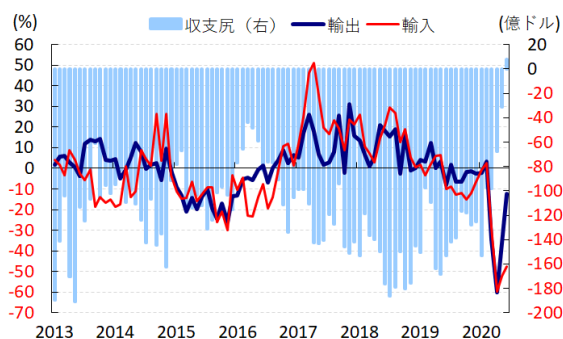
15日に発表された6月の輸出額は前年同月比▲12.4%と4ヶ月連続で前年を下回る伸びとなったものの、前月（同▲36.2%）からマイナス幅は縮小した。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は2ヶ月連続で拡大しており、中期的な基調も拡大傾向となるなど底打ちしている様子がうかがえる。財別では、主力の輸出財である機械製品関連のほか、宝飾品など幅広い分野で底打ちしており、世界的に経済活動の正常化に向けた動きが出ていることに加え、インド国内でも外出禁止令の段階的解除による経済活動の再開が進んでいることが影響している。一方の輸入額は前年同月比▲47.6%と4ヶ月連続で前年を下回る伸びとなったものの、前月（同▲52.4%）からマイナス幅は縮小した。しかし、前月比は2ヶ月ぶりの減少に転じている上、中期的な基調は減少傾向で推移するなど輸出とは対照的に頭打ちの状況が続いている。国際原油市況の底入れの動きなどを反映して鉱物資源関連の輸入に底打ち感が出ているものの、機械製品関連など幅広い財の輸入は低調な推移が続き輸入全体の重石となっている。結果、貿易収支は+7.90億ドルと前月（▲31.47億ドル）から約18年半ぶりの黒字に転じている。

図6 IN インフレ率の推移



(出所)CEICより第一生命経済研究所作成

図7 IN 貿易動向の推移



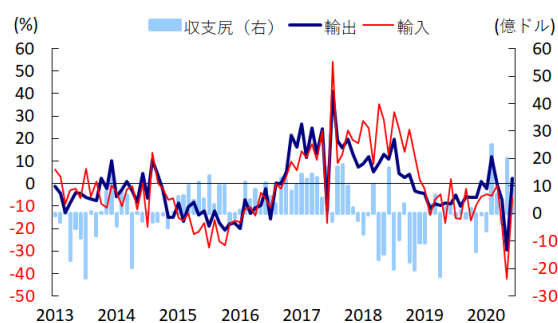
(出所)CEICより第一生命経済研究所作成

[インドネシア]～輸出に底打ちの兆候も、輸入は輸出を上回るペースでの減少が続き貿易収支は黒字を維持～

15日に発表された6月の輸出額は前年同月比+2.28%となり、前月（同▲29.48%）から4ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じた。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比も4ヶ月ぶりの拡大に転じるなど底打ち感が出ているものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど頭打ちの状況を脱してはいない。財別では、製造業関連や農産品関連の底打ちの動きが全体を押し上げる一方、原油及び天然ガスをはじめとする鉱物資源関連の輸出は頭打ちの状況が続いており、主要国において新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）の感染収束を受けた経済活動再開の動きが広がりを見せていることが影響しているとみられる。一方の輸入額は前年同月比▲6.36%と12ヶ月連続で前年を下回る伸びで推移しているもの

の、前月（同▲42.33%）からマイナス幅は縮小した。前月比も3ヶ月ぶりの拡大に転じており、中期的な基調は拡大傾向に転じるなど底打ちしている。財別では、原油及び天然ガス関連の輸入は引き続き弱含む展開が続く一方、これら以外の輸入に底打ち感が出ており、経済活動再開の動きなどが押し上げ要因になっているとみられる。結果、貿易収支は+12.67億ドルと前月（+20.16億ドル）から黒字幅が縮小している。

図8 ID 貿易動向の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

以 上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。